

第 273 回新潟外科集談会

日 時 平成 24 年 5 月 12 日 (土)
午後 1 時 30 分～午後 3 時 27 分
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

一 般 演 題

1 自然消失した乳がんの 1 例

岡村 直孝

長岡西病院 外科

癌の自然消失は知られているが、稀と思われている。私はこの度、乳がんの自然消失例を経験したので報告する。症例は診断時 80 才女性。以前より抑うつ状態、認知症などあり、施設に入所中。乳房腫瘍に気づき、当科を受診。針生検にて乳癌と診断された。根治手術を希望せず、経過観察となった。間もなく食欲不振となり、活動性も低下したため、当院に入院した。症状改善の後、精神疾患などの治療のため他院に転院し、更に施設に戻った。8 年後、転倒を機に歩けなくなり、食事も低下したため当科に入院した。この時、腫瘍が消失していることが判明。CT を行ったが、原病巣も転移巣も認めなかった。以上より、自然消失と判断した。入院中に胃瘻を造設し、施設に戻った。Challis らは 1900 年から 1987 年までの間の 741 例の癌の自然消失例を集計し、うち、乳癌は 41 を占めた。乳癌の 1～2 割が自然消失するという推測もあり、意外と稀でない可能性もある。

2 気胸を伴う乳癌術後の局所再発例に胸壁切除再建を行なった 1 例

沢津橋孝拓・中塚 英樹・森岡 伸浩
清水 孝王・宮下 薫

燕労災病院 外科

症例は 41 歳、女性。右乳癌 (T3N3cM0 Stage

III c) に対して 2004 年 3 月 29 日に Bt + Ax を行なった。病理は invasive ductal carcinoma, scirrhous carcinoma, ly1, v1, ER (+), PR (+), Her 2 (+) であった。その後、術後補助化学療法を施行されていたが、2008 年 1 月に多発骨転移にて再発し、続いて右前胸部にも局所再発を呈した。2011 年 12 月 2 日未明に呼吸苦を自覚。胸壁局所再発の胸膜浸潤による開放性気胸の診断で入院となった。直ちに胸腔ドレーンを挿入後 12 月 22 日に胸壁切除再建 (有茎広背筋皮弁) を施行した。その後の術後経過も良好で術創部の感染なども呈することなく 1 月 6 日に当科退院し、現在も外来化学療法を継続している。

今回我々は気胸を伴った乳癌術後の局所再発に対して胸壁切除再建を施行した。本症例のように致命的な状態でも、肺肝脳転移を認めない場合は、病態改善のために上記のような手術が適応となりうると考えられた。

3 二次性副甲状腺機能亢進症手術症例の検討

小川 洋・角田 和彦・佐藤 攻

信楽園病院 外科

内科的治療抵抗性の二次性副甲状腺機能亢進症 (SHPT) に対して行われる副甲状腺摘出術 (PTX) は透析患者の QOL ばかりでなく生命予後の改善に寄与する。2002 年 1 月から 2011 年 12 月までに SHPT に対して外科治療を行った 131 例の手術成績および再発例・i-PTH 制御困難例の問題点等について検討した。初回手術では副甲状腺全摘と大胸筋内自家移植を原則とした。PTX 内訳は初回手術症例 117 例、再発に対して救済手術を行った 14 例であった。男女比は 63 : 68 で年齢は 56 ± 10 歳。初回手術例の術前透析期間は 16.0 ± 7.5 年であり、術前 i-PTH 値は 1182.5 ± 583.7 、術直後 i-PTH 値 96.3 ± 234.8 。初回手術症例における術直後 iPTH ≤ 60 pg/ml 群は 70 % であった。再発 14 例のうち 10 例は初回手術時に描出出来なかった異所性副甲状腺が原因と考えられ、縦隔内病変 4 例に対して胸骨縦切開にて摘